

牧師室から (2022.1.2)

巷は年末から正月休みの時期である。皆さんはどのように過ごされているだろうか。久しぶりに家族がそろって一家団欒もあるだろうし、寝正月もあるかもしれない。今回は休暇、余暇について考えてみたい。以前に、フランス語教師から「あなたは余暇にどんな趣味を持っていますか」と尋ねられたので、つい「寝ることです」と答えてしまったことがある。するとその先生は「日本人からはよくそのような答えをもらうけれど、我々には考えられない」と言われたことがある。丁度その頃は、小生は忙しくしていて、余暇というのが仕事の疲れを癒し、リフレッシュして仕事に臨むため、すなわち仕事のための余暇になっていたのである。そもそもヨーロッパの人たちはおおよそヴァカンスを楽しみにし、大事にしている。言ってみればヴァカンスのために働いているようなところがある。つまり彼らにとって、仕事は余暇のためであるともいえる。仕事のための余暇か、或いは余暇のための仕事か。確かに牧師の仕事は会社員に比べると、時間的な拘束は緩いかもしれない。しかし逆に、余暇と仕事の境界があいまいである。オン・オフのスイッチの切り替えがなかなか難しい。とは言えこれには個人差があることであろう。神学生の頃に、教授から「箸の上げ下ろしにも神学を」とのお言葉を頂いたことを思い出した。主の呼びかけに応えていくことが、絶えず意識の内にある。召命という訳語は含蓄がある言葉であると感じた。

(鈴木淳一牧師)